

御便殿



御便殿 —その歩み—

御便殿は、東宮殿下（皇太子、後の明治天皇）が明治40年（1907）に山陰を行啓された際、浜田での宿泊施設として建築されたものです。この行啓で宿泊施設に用いられたものとして、鳥取市の仁風閣や松江市の興雲閣等が知られていますが、当時刊行された『山陰道行啓録』では、浜田の御便殿を山陰両県で「随一の御旅館」として紹介しています。

東宮殿下の宿泊後は、旧浜田藩主松平家の別荘として、また、昭和9年頃には公会堂と行啓記念館として活用されていました。その後、昭和23年に個人所有となり、昭和30年以降は宗教法人施設として活用されてきましたが、平成18年5月に浜田市に寄附いただき、約111m北西に曳き移転して、現在地に保存されました。

たいへん大きな畳廊下が設けられていたほか、東玄間に通じる幅一間の畳廊下や六畳と八畳の部屋が各2室ありました。

後館には、十二畳の御次の間と、その隣に八畳の便殿（玉座）があります。便殿は床が周囲より一段高く、欄間にには鳳凰が透し彫りされ、部屋の三面には御簾が付く等、「御所」のような造りになっていました。この他、八畳の御寝室や御食堂、十畳の物産陳列所（松の間）が設けられていました。

角屋には六畳の御化粧室、御廁室、二間半に一間半の御浴室が設けられていました。

前館の大きな畳廊下や後館、角屋は東宮殿下のための空間となっていました。当時の皇室と国民との関係性がよく表れています。また、当時の建築技術や歴史的背景を考える上でも貴重であり、石見の近代を代表する建築物といえます。

御便殿と浜田城の庭園

御便殿は、浜田城の庭園の一角に建築され、その庭園を御便殿の庭園として活用しました。

庭園は、池泉回遊式の大名庭園で、池には中ノ島と呼ばれる大きな島と祠の建つ小さな島が浮かび、掬翠池とも呼ばれて、市民に親しまれてきましたが、昭和41年に造成され、その姿を消しました。現在、この庭園跡内の北側に御便殿が曳き移転されています。



江戸時代の浜田城庭園
(浜田城下町絵図<浅野家旧蔵>部分)

現在地 島根県浜田市殿町83番地246

建築年 明治40年(1907)

構造 木造瓦葺平屋建

建物面積 545.65m²

浜田市教育委員会

〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地
TEL(0855)22-2612



御便殿の建設

御便殿は、旧浜田藩主の松平家が濱田營造株式會社に依頼し、明治39年（1906）10月に着工、11月29日に棟上げされ、明治40年（1907）春に完成しました。また、御便殿の東側には、御湯沸し所、郡役所出張所、詰所、馬車置場等も建てられていました。建築費は1万7千円、松平家所有の浜田城跡から伐採した用材を金額に換算すれば約3千円、庭園築造費、室内設備費等、総額で約3万円にのぼるといわれています。



御便殿正面（明治40年）



浜田川対岸から望む御便殿（明治40年）

東宮殿下の行啓と御便殿

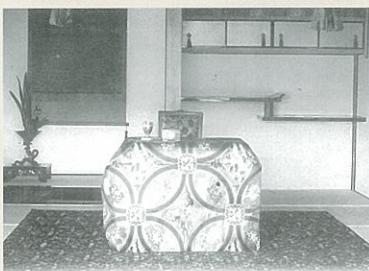
東宮殿下の山陰行啓は、明治40年（1907）5月10日に東京を出発し、浜田の御便殿には31日午後12時20分に到着、その後、拝謁、陪食が行われました。

6月1日は、浜田中学校、浜田高等女学校を視察後、浜田城本丸跡、御便殿庭園を散策されています。

2日は、歩兵第21連隊の視察後に御便殿庭園から船で松原、外ノ浦の周遊を楽しめました。

3日は、御便殿を午後出発し、瀬戸ヶ島から長浜沖に停泊する御召艦「鹿島」に乗船、宿泊され、4日早朝6時に隠岐へ向かって浜田を出発されました。

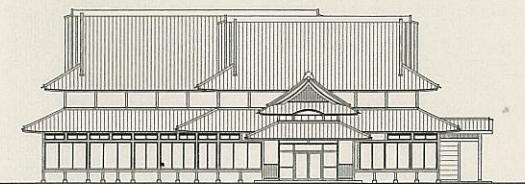
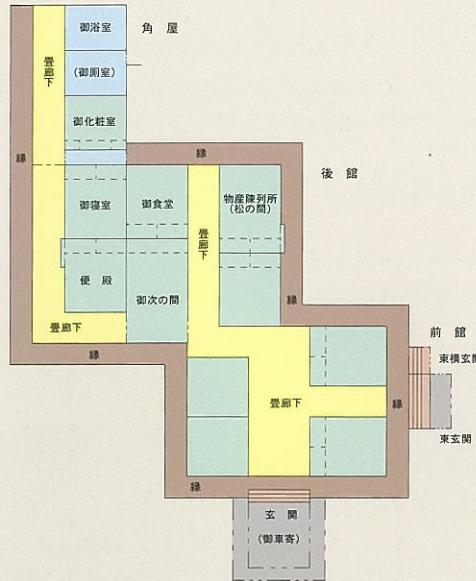
6月7日には、御便殿を一般公開しています。



便殿玉座（明治40年）



庭園から望む御便殿（明治40年頃）



御便殿復元平面図及び現状立面図 ($S=1/300$)

御便殿の構造

御便殿は、大きな入母屋の屋根を持つ前館と後館、そして後館に附属する角屋から構成される大型の近代和風建築物で、「御殿」と呼んでも差し支えのない規模と構造をもっています。

前館は、御車寄から玄関を上ると、真正面に幅二間に長さ五間の